HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幼児への面接において面接者はどのようにあいづちを打つか
Author(s)	加地, 雄一; 丹藤, 克也; 打越, 愛 他
Citation	東京都立大学心理学研究, 14, 57-60
Issue Date	2004
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44692
Type	journal article
File Information	naka_97.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

東京都立大学心理学研究
2004, Vol.14 57-60

原　著

幼児への面接において面接者はどのようにあいづちを打つか[1)]

How does an interviewer use backchannel responses during an interview with young children?

加地雄一*・丹藤克也**・打越愛*・山口絵美***・仲真紀子**

要　約

本研究の目的は，幼児への面接におけるあいづちが，大人同士の会話におけるあいづちに比べてどのように異なるのかを明らかにすることである．具体的には，被面接者である幼児の発話に対して，大人の面接者がどれくらいの頻度，どのタイミングであいづちを打つかを検討した．まず，女子大学生が幼稚園児とゲームをするという出来事を設定し，実際にインタラクションを行った．その一週間後，子どもに出来事や人物に関する面接を別の女子大学生が行った．面接のトランスクリプトを分析したところ，①幼児への面接では大人同士の会話に比べて面接者がより頻繁にあいづちを打っていること，②幼児の発話のほぼ1文節に1回のタイミングで面接者があいづちを打っていること，③幼児の先行発話なしで面接者があいづちを打つことが比較的多いこと，を示す結果が得られた．

Key words：あいづち，面接，幼児

目的

面接をスムーズに進行させるためには，面接者の行動が重要である．この面接者の行動の一つに「あいづち」がある．あいづちには談話の進行を促したり，助けたりする効果があると指摘されている（堀口，1991）．こうした機能に関する研究の他に，頻度とタイミングといった使用実態に関するものがある．例えば，中国語と日本語におけるあいづちを比較した研究（楊，1999）によれば，日本語のあいづちは頻度が高く，適切なタイミングが数多くあるという．使用実態に関しては，このような言語間比較だけでなく，日本語について様々な場面で検討される必要があるだろう．そこで本研究では，これまであまり対象にされてこなかった子どもの面接という場面を扱い，被面接者である子どもの発話に対して，大人の面接者がどれくらいの頻度，タイミングであいづちを打っているかを明らかにする．子どもが話しやすいようなあいづち行動を探る上でも，使用実態について検討する必要があると考えられる．

あいづちの具体的定義は研究者によって様々であり，応答的なあいづち，繰りかえし，聞き返し，うなずきなどの非言語的行動をどこまで含むかによって異なる（表1）．本研究では，質問に対する応答をあいづちに含めず，「はい」「うん」「そうですか」といった，いわゆるあいづち詞と呼ばれるものと，繰り返し・聞き返し（本研究では両方を合わせて「反復」と定義する）を分析の対象とする．

表1．あいづちの定義

	あいづち詞	反復	応答	非言語
西澤ほか（1998）	○	?	×	○
楊晶（1999）	○	○	×	○
本研究	○	○	×	×

あいづちの使用実態については，主に頻度とタイミングの観点から研究が行われてきた．

頻度の算出については，時間を単位にした頻度，音節数に対する頻度（表2），総発話文数に対するあいづち文数の比率（黒崎，1987）など，研究者によってまちまちである．時間を単位とした場合は，かかった時間が同じであれば，ゆっくりと言葉少なげに話した後で打たれたあいづちと，早口でたくさん話した後で打たれたあいづちとの区別はつかなくなる．また，文を単位とした場合は，発話のどこからどこまでを1文とするかといった文の認定の問題や，文の途中でもあいづちが打たれることがあるといった問題が残る．そこで本研究では，発話の量がそのまま反映される音節数を単位として分析する．なお本研究では，「促音，拗音，

表2．あいづちの頻度（＊楊晶，1999からの引用による）

研究	頻度	尺度	面接場面
小宮（1986）	6.1秒に1回（ラジオ），9.6秒に1回（テレビ）	時間（秒）	大人同士
山本（1993）	18.18音節に1回（100音節に5.5回）	音節	大人同士
登里（1994）	27.03音節に1回（100音節に3.7回）	音節	大人同士

長音を含めない平仮名1文字分」を1音節とした．

あいづちのタイミングとしては，話し手の側に音声的な弱まりが現れる時にあいづちが生じやすいことが指摘されている（堀口，1991）．タイミングには音声的な強弱だけでなく，発話の長短も関係していると考えられる．しかし，話し手がどれくらい話した時にあいづちが生じやすいのかについてはあまり明らかになっていない．そこで本研究では，先行発話の長さに対するあいづちのタイミングについて，音節数を単位に分析する．ここでいう先行発話とは，あいづち直前から1つ前の面接者の発話までの被面接者の発話を指す．先行発話の長さとあいづち頻度は重なる部分があるが，先行発話の長さがあいづち直前の話し手の発話のみを対象とするのに対し，あいづち頻度はあいづちが生じなかった話し手の発話も含めた全体の発話を対象とする点で両者は異なる．

方法

対象　東京都稲城市A保育園に通う園児3名（6歳男児1名，5歳女児2名）

手続き　面接で質問する内容として，女子大学生一人が，26名の子ども達の前でゲームをするという出来事を設定し，インタラクションを行った．ゲームの内容は，「動物当てゲーム」と「ジャンケンゲーム」の2つであった．ゲームにかかった時間はそれぞれ10分前後で，全体で約20分であった．

「動物当てゲーム」とは，動物が描かれたパネルの上に何枚かの紙を貼り，少しずつ上の紙をはがしていき，下に描かれたイラストが何の動物であるかを当てるというものであった．「動物当てゲーム」の問題は3題で，ライオン，豚，象の順にイラストを使った．動物当てゲームの後，「ジャンケンゲーム」を行った．「ジャンケンゲーム」とは，女子大学生一人に対して子ども達全員でじゃんけんをし，女子大学生に負けた子どもは着席し，勝った子どもはジャンケンを続け，最後まで残った子どもが優勝するという内容であった．

一週間後，別の女子大学生が子どもに出来事や人物に関する面接を行った．面接での言語的やり取りは園児に許可を得た上でテープに録音し，書き起こした．園児26名に対して行われた面接のうち，子どもの発話が少なすぎるものを除き，無作為に選んだ3名に対する面接を分析対象とした．

結果と考察

「あいづち」として分析対象とした「あいづち詞」および「反復」の例をそれぞれ表3，表4に示した．抽出されたあいづちは3つの面接全体で130個であった．そ

表3．あいづち詞の例（斜体太字部分）

発話者	発話内容
女児	でも昨日は
面接者	***うん***
女児	お姉さんが来たとき－
面接者	***うん***
女児	なんかー
面接者	***うん***
女児	白い色と－
面接者	***うん***
女児	あのなんか黒い色と
面接者	***うんうん***

表4．反復の例（斜体太字部分）

発話者	発話内容
面接者	他にどんな動物がいたの？
女児	うーんと，かばさん
面接者	***かばさん***
面接者	ほかには，ほかには？

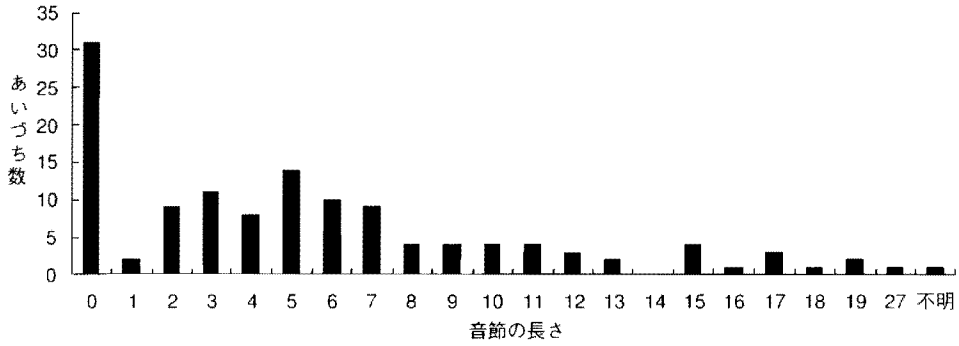

図1．あいづち直前の発話の長さ

のうち「あいづち詞」が84.6%（110個），「反復」が15.4%（20個）であった．

あいづち頻度　あいづち頻度の指標として，話し手（幼児）の発話の音節数に対する面接者のあいづち数の割合を算出した結果，平均8.0音節に一回の頻度であった．これは，先行研究（表2）で大人同士の会話において得られた頻度と比べると，より頻繁であるといえる．つまりこれは，大人同士の談話に比べて，幼児への面接では面接者がより頻繁にあいづちを打っていることを示すものである．

あいづちのタイミング　あいづちのタイミングの指標として，あいづちに対する先行発話の長さ（音節数）を用いた．面接者のあいづちに対する幼児の先行発話の長さは，平均5.4音節であった．これは文節の区切り目で，1文節毎に1回あいづちが打たれていると解釈することができる．

先行発話の長さに対するあいづち数を図1に示した．ここで示したあいづち数は3つの面接で得られたあいづちの数をまとめたものである．図1をみると先行発話の長さが0のあいづち数が最も多い．これは，1)幼児の非言語的な行動に対して面接者があいづちを打っている，2)面接が円滑に進むように，面接者が幼児の発話がなくても自分であいづちを打っている，と考えられる．

図1において先行発話0を除いて最もあいづち数の多かった，音節数5の先行発話を具体的に取り出すと表5のようになった．先行発話の中には「折り紙でー」，「電車とねぇ」といった助詞で終わるものがあり，幼児が面接者のあいづちを誘発するような発話をしていることが示唆される．

表5．音節数5の先行発話の全て

覚えてる	男の子
折り紙でー	はし，1回
もらったとか	そのとこに
二人ずつ	電車とねぇ
うーん，なかった	電車とねぇ
＊＊＊ちゃん	うん，だよねー
泣き止んだ	わかんない

まとめ

本研究では，幼児への面接における面接者のあいづちについて，頻度とタイミングの観点から分析を行なった．

頻度については，大人同士の会話に比べて，より頻繁に幼児に対してあいづちが打たれていることが明らかとなった．これは大人の耳には頻繁に聞こえる可能性もあるが，幼児にとっては話しやすい頻度であることも考えられる．今回得られた頻度が，話しやすさという点で幼児に適しているかどうか，今後の研究が望まれる．

タイミングについては，ほぼ1文節に1回のタイミングであいづちが打たれていることが示唆された．また，先行発話がなくても面接者はあいづちを打っていることが明らかとなった．これは，幼児の非言語的な行動に対してあいづちを打っている場合と，面接者が自発的に打っている場合が考えられる．今後VTR録画などによって検証していく必要があるだろう．さらに幼児は面接者のあいづちを引き出すような発話をしている

ことも示された．例えば，あいづちの直前には「電車とねぇ」といった助詞で終わる発話がみられた．

あいづちを頻繁に打つことには，対話を潤滑にする効果もあると考えられるが，それが誘導となる可能性もあるだろう．今後この点についても研究が必要であろう．

面接において幼児が話しやすいようなあいづち行動を探っていく上で，まずは幼児への面接におけるあいづち行動の実態把握が必要であると考えられる．本研究はあいづち行動の実態を明らかにした点で意義があると思われる．

引用文献

堀口純子 1991 あいづち研究の現段階と課題 日本語学，10，31-41.

小宮千鶴子 1986 相づち使用の実態—出現傾向とその周辺— 教育研究論叢，3，41-62.

黒崎良昭 1987 談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について— 国語学，150，109-122.

水谷信子 1983 相づちと応答 水谷修(編) 講座日本の表現3 話しことばの表現 筑摩書房 Pp.35-44.

西澤弘行・宮田Susanne・矢富直美・宇良千秋 1998「相づち」再考—幼児と痴呆性老人に於ける「相づち行動」についての探索的研究— 常磐大学人間科学部紀要「人間科学」，16(1)，1-16.

登里民子 1994 あいづち習得の縦断的研究 お茶の水女子大学修士論文

山本恵美子 1993 日本語学習者におけるあいづちの習得に関する研究 お茶の水女子大学修士論文

楊晶 1999 中・日両言語の相づちに関する一考察—頻度とその周辺— お茶の水大学人間文化研究年報，23，28-28.

注

* 東京都立大学大学院人文科学研究科

** 北海道大学大学院文学研究科

*** 東京都立大学人文学部

1) 本研究は，第4著者山口絵美の研究（東京都立大学人文学部教育心理学科心理学専攻2001年度特別研究『子どもの目撃証言と人物の識別』）で得られた実験データの一部を再分析したものである．本研究の一部は，法と心理学会第3回大会（2002）および，日本認知心理学会第1回大会（2003）において発表された．また本研究は，丹藤克也・打越愛・加地雄一・仲真紀子（2002，幼児への面接（1）質問と応答の分析：どのような問いがどのような答えを引き出すか，法と心理学会第3回大会）および，打越愛・加地雄一・丹藤克也・仲真紀子（2002，幼児への面接（2）間（ま）の分析：面接者は幼児の答えをどれだけ待てるか，法と心理学会第3回大会）との一連の研究であったものを独立してまとめたものである．

謝辞

実験にあたりご協力いただいた稲城市A保育園の子ども達，先生方，そして面接を行った古田真祐子さん，子ども達の前でゲームをした西川涼子さんに深く感謝いたします．